も高率であった（p < 0.05）。
以上の結果より急性心筋梗塞症において、右脚ブロック合併の有無および右脚ブロックが一過性か持続性か心機能および予後
の予測に有用であると考えられた。
（杏林医会誌 31(4) : 563-572, 2000）

論文審査結果の要旨

右脚ブロックを合併した急性心筋梗塞の予後は不良とされてるが、その急性期から慢性期にかけて非侵襲的検査方法で心機能評価を行わない。発症後長期経過時の予後を検討した報告はない。

本研究では、杏林大学医学部付属病院 CCU に入院した急性心筋梗塞 1345 例を、入院中完全右脚ブロック（RBBB 群）を認めた RBBB 群 111 例と右脚ブロックを認めなかった非 RBBB 群 1234 例に分け、さらに、RBBB 群のうち生存退院した 75 例について、入院中右脚ブロックが消失した一過性 RBBB 群（48 例）と退院時まで同ブロックの持続した持続性 RBBB 群（27 例）に分けて心機能と予後を検討した。

心機能については、入院時に断層心臓断層所見等により左室拡張末期径、左室収縮末期径、左室壁運動異常を、さらに、入院 1

ケ月後に心臓スキャン法により左室駆出率および心筋シンチグラフィーにより total defect score を測定した。
それらの結果、RBBB 群では非 RBBB 群に比較し左室壁運動異常、total defect score が高値で梗塞範囲は広く（p < 0.01）、左室駆出率は低下し（p < 0.05）、院内死亡率も高値であった（p < 0.05）。
持続性 RBBB 群と一過性 RBBB 群を比較すると、急性期においては両群には左心機能の有意差は認められなかったが、持続性
RBBB 群では発症 1 ケ月後に左室壁運動異常と total defect score が高値（P < 0.01）かつ左室駆出率は低値であり（P < 0.01），また 3 年後までの死亡率も高値であった（P < 0.05）。

以上、本論文では、非侵襲的検査方法を用いて急性心筋梗塞における右脚ブロック合併の臨床的意義を明らかにしており、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名（生年月日） 山口博（昭和 38 年 12 月 22 日）
本籍 茨城県
学位種類 博士（医学）
学位授与番号 博 医 第 357 号
学位授与の日 平成 13 年 3 月 9 日
学位授与の要件 学位規程第 6 条
学位論文項目 Experimental Study of Chemical Embolus Therapy Combined with Radiotherapy for VX2 Bone Tumors

論文審査委員 教授 藤岡保範 教授 賀屋順一 教授 吳屋朝幸 教授 近藤 仁 教授 荒澤隆司

学位論文の要旨

整形外科領域での骨腫瘍に対する、シスプラチン粗結晶を用いた化学療法・放射線併用療法の臨床応用を目的に研究を行った。
実験は VX2 細胞系による実験的家系骨腫瘍を作成し未治療、化学療法、放射線療法、化学療法・放射線併用の 5 群に分け、体重、X 線、血管造影、病理組織学的所見に両群の差を検討した。

この結果、体重以外の項目で化学療法・放射線併用療法群が、化学療法、放射線の単独群、未治療、化学療法群に比し、有意な局所

抗腫瘍効果が得られた。放射線療法では、化学療法、放射線併用

療法群、化学療法、放射線の単独群には有意差は認めなかった。

以上より、化学療法療法に放射線療法を併用することで補助効果

があると考えられた。しかし、放射線療法は有効が少なく、臨床

においては複数回の治療が必要と考えられた。

（Int J Clin Oncol 5 : 386-394, 2000）
論文審査結果の要旨

整形外科領域での化学療法の臨床応用の可能性を追求する目的で、実験的骨腫瘍に対するシスプラチン粗結晶を用いた化学療法・放射線併用療法の実験的研究を行った。

実験方法：家児に大群の腫瘍を作製し、1）未治療群、2）腫瘍群、3）化学療法群、4）放射線照射群、5）化学療法・放射線照射併用群の5群を用いて実験を行なった。腫瘍を作製後1週目未治療群を除き他群で腫瘍を最小にし化学療法、放射線照射、化学療法と放射線照射および化学療法と放射線照射を行ない、全ての群の実験動物は5週目に処理した。化学療法治療群にはシスプラチン粗結晶3mg、体重Kgを大腿動脈より注入し、放射線照射は1回線量25Gyで行なった。

体重の変化を観察とともに、局所のX線撮影および血管造影、病理組織学的検査を行ない、局所における腫瘍の有無を比較検討した。組織学的検査では腫瘍の組織学的所見及び腫瘍組織に占める変性および壊死に陥った腫瘍の面積比を算出した。また、腫瘍についても組織学的に局面積に占める転移腫瘍面積の割合で検討した。

実験成績：体重以外の項目で化学療法・放射線照射併用群が、化学療法および放射線照射の単独群、未治療群に比し、有意な腫瘍の抗腫瘍効果が認められた。肺転移の検査では、化学療法・放射線照射併用群、化学療法および放射線照射の単独群には有意差は認められなかった。

以上より、実験的骨腫瘍では化学療法療法が放射線照射療法を併用することで局所における補助効果があるものと考えられた。

本実験的骨腫瘍でのシスプラチンを用いた化学療法療法に放射線療法を併用することで局所における抗腫瘍効果に増加のあることが示されたことは、今後、骨腫瘍の局所療法における新たな展開に繋がる基礎的実験として評価され、学位論文として価値あるものと認めた。

氏名（生年月日） 和久昌幸（昭和24年5月8日）
本籍 東京都
学位 専門 博士（医学）
学位授与番号 第358号
学位授与の年 1955年3月9日
学位授与の要件 学位課程6年
学位論文項目 透析症例の心機能と予後に関する臨床的研究
学位論文委員 教授 北木 清 教授 須藤憲一 教授 赤川公明 教授 鳥羽研二 教授 大野賀樹

学位論文の要旨

【目的】慢性維持透析症例を対象に心エコーを用い、心機能と予後に関する検討を行った。

【対象・方法】1）慢性維持透析症例422例（男/女=253/169例、平均年齢61.4±14.1歳、平均透析期間79.7±55月）を対象とした。2）次に、これらの慢性維持透析症例中で治療適応者に死亡した76例を対象に心機能低下を指標として2群に分類し検討を行った。心機能低下の指標はEF≤40%とした。1群（10例）は透析導入初期からEFが低下し持続した症例、2群（11例）は透析導入中にEFが低下し持続した症例、3群（55例）は透析中にEFの低下を認めたなかった症例とした。

【成績】1透析症例は心エコー上心室中隔厚13.2±2.2mm、左室後壁厚13.2±2.0mmと左室肥大を示した。死亡例と生存例との心エコー所見の比較では、生存例でのEF有意に高下（死亡例；54.6±15.5% vs 生存例；59.5±10.6%）、左室拡張終期径（死亡例；53.4±12.2mm vs生存例；50.5±7.7mm）左室収縮終期径（死亡例；40.2±12.9mm vs生存例；35.8±7.6mm）の拡大を認めた。2）1群は、10例全例が心疾患（心不全6例、突然死2例、心筋症筋2例）で死亡し、基礎疾患として6例が糖尿病であった。1群は、10例が心疾患（心不全2例、突然死6例、心筋症筋2例）で死亡し、突然死例6例と多かった。1群は、心疾患（心不全5例、突然死5例、心筋症筋4例）と9例のあった。Kaplan-Meier法による生存率の検討では1群が2群、3群に比べ初期から有意に低下しており、1群の累積生存率50%3ヶ月に対して1群26ヶ月、3群25ヶ月であった。また、1群の心機能低下点から死亡までの期間による検討では、累積生存率50%16ヶ月と短かった。

【考察】慢性維持透析症例における心エコーを用いて長期間の経過観察を行った報告は少なく、かつ死因について言及した論文は著しく存在しない。

今回の研究では透析導入早期心機能低下例と経過中に心機能不全障害を生じた症例が存在した。早期心機能低下例は高率に心疾患